

# 体験的教師論

## A Teacher's Qualities

尾形 隆夫\*  
Takao Ogata

### 【はじめに】

大学、短大の履修課程の見直しと、教育組織の改組をめぐって、昨今の大学は揺れている。大学進学希望者数の激減は、進学率の増大を考慮に入れても、明らかな傾向として既にわれわれの知るところである。

一方、女子の4年制大学進学希望者の増大が明白となった今日、短期大学は生き残りをかけて死にもの狂いの努力を重ねている。また短大教育のあり方が問われてくるのも当然である。

筆者は自分の学生時代をふりかえるとともに、数十年の教師生活を振り返って、日頃感じていることを列挙したい。教育にはカリキュラムも設備も大切ではあるが、結局、教えるのは機械ではなく人間であるから、必然的に教師の資質というものがクローズアップされてくるのである。

いったい高校卒業と短大卒業との違いは何だろうか。短大を卒業した人は、すこし知識は多いかもしれない。短大教育では広い知識と専門技術を習得させて、ますます進む高齢化社会の中で80数年の生涯教育をうける時に、そのより所となるものを与えておくことも重要である。つまり広い教養を2年間に与えておくことである。もしチャンスがあれば更に勉強する時

の基礎を身につけさせることであろうか。

また短大では、2年という短期間に——新入生と卒業予定者しかないキャンパスでは、先輩と後輩の結びつきも難しい状況なので——どうしても4年制大学の場合よりも、学生と教師の親密な人間関係が必要になる。4年間で形成される教師と学生のよき関係を2年間で造り出すのである。しかも短大を卒業したものの、ほとんどが、それが最終学歴となるのであるから、卒業時に自分は何を学んだかもわからず、母校愛も生まれないうまま社会に出てゆくのではないかという心配がある。これでは短大は生き残れないのであって、ここに4年制大学の教師と短大教師の学生に対する対応の違いがあると思う。

以下、筆者の体験、その失敗と反省と成功と希望を含めて、今日、短大の求める教師像を考えてみたい。これは実験の報告である。

### 【教師の資質】

まず、かつて某国立大学の二次試験問題に出題された英文の要約を紹介する。

教師に望ましい個人的資質をリストにした場合、ほぼ大方の賛同を得られるものは以下のようなものになろう。

\*基礎教養課程

- (1) 教師の個性は、さすががしいくらいに活気があって、魅力的でなければならない。とはいても、肉体的に美しくない人、いや醜い人さえも、除外するものではない。なぜなら、こうした人々でも、とても人間的に魅力のある人が多いからである。しかし、過度に興奮しやすく、暗い性格で、皮肉屋で欲求不満なタイプの人々は除外される。退屈で、全く消極的な性格の人も除外されるのである。
- (2) 教師が他人に思いやりの心をもつことが、絶対に必要である。つまり他人の考えや感情に共鳴するということである。これと密接に関係するのが寛容になれる能力である。もちろん悪い事に対して寛大になるというのではなく、学生に誤りを犯させる人間の性格の弱さ、未熟さに対して寛大になれる能力である。
- (3) 教師は知的にも道徳的にも誠実であることが不可欠である。これは聖人であれということではない。教師は自分の知力とその限界を知り、自分の生活を導く道徳原理について考え、それに対してはっきりした態度をもっていなければならないという意味である。さらに、教師はちょっとした役者であるべきである。それは教育するためのテクニックの一部であって、そのためには、時には教師も一授業を活性化し、誤りを正し、称賛を与えるため――演技することができなければならない。
- (4) 教師は絶大な忍耐力をもたなければならない。これは主として自己修養、自己鍛練の問題と言えるであろう。なぜなら、われわれは生まれながらにして、そのような忍耐力をもっているものは一人もいないからである。教師はすみやかに平常心をとりもどすことができなければならない。なぜなら教育はきわめて大きな神経のエネルギーを要求するからである。教師は、子供を扱うすべての大人が耐えなければならない、数えきれないほどの、些細ないらだちを抑えられなければならない。
- (5) 教師はいつも学びつづけたいと思うような

種類の心をもつべきである。教育とは、その仕事でだれも完璧とはなりえない職である。つまり、つねにもっと学ぶべきものがあるのである。学ぶべき3つの主要な対象がある。教師が教えている教科目。教師が教えているクラスの個々の学生にその教科を一番じょうずに教えられる方法。そして（これが一番大切なのであるが）その教科が教えられるべき若者あるいはおとな、この3つである。

上に述べられたことは、教師に望ましい個人的資質を指しているが、ここには幼稚園から大学および老人大学まで、すべての教師の条件が示されている。これを手がかりに筆者の意見を加えてゆきたい。しかし、あくまでも筆者の実行していることだけではなく、失敗から反省、これから実行したいと思っていること、やるべきであるがまだやれないということなど、すべてを含んでいることを付け加えたい。

### 【教室で】

学生はなにを学びたいと思っているか、意外とわれわれは知らない。授業内容が学生の入学前に期待していたものと相当違いがあると、学生は失望する。そこを我慢して、静粛に、まじめに勉強することは、かなりのストレスである。クラスでは気楽なムードで自由な雰囲気望ましい。そうすれば学生の質問、希望などが自然に出てくることになる。要は何が学生のためになるか、とつねに原点に立ち帰ることが最も大切なことだと思う。特に、英語の場合必修科目については、学生の知的到達度とテキストの難易度、効果的学習法、教えたことが学生の頭によく入るように、実例やエピソード、時間的配分など、つまり教案をつくる必要がある。必修という縛りがあるため特に教え方を研究しなければならない。学生の疑問、質問を予測すること。学力の進んだ学生を飽きさせず、学力の遅れている学生にはあきらめさせないような配慮と、どのあたりのレベルを中心に教えるかをさ

ぐる。時々学生たちが、なるほどと思ったり、ああそういうことか、と思うようなことを言うことが基本であろう。筆者の担当する英語には、言葉のロマンスやエピソード、似た表現であるが意味が全く違う場合など、材料にこと欠かない。また高校時代と違う何かをクラスにもちこまなければいけない。それも教師が自らの知識を自慢するような感じを学生に与えないやり方によってである。

質問はその授業の中で行ない、できるだけその場で解決したい。きびしい印象を学生に与えると質問は出てこない。廊下でこっそりと質問する学生が、こんな質問してクラスの学生に笑われないかと心配した、ということがよくある。質問は皆に披露して解決してゆきたい。

### 【叱る】

クラス全員を対象に教えている時、してはいけないことは、個人を、出欠やテストの結果を公表しながら叱ることである。叱る必要があるときは、個人的にすること（いつも教師がクラスにかなり遅れてくるのに、学生にだけ出欠、遅刻を厳しく言うのはおかしい、とまで言う学生がいるそうである）。全員または、かなり多くの学生を叱るときは、事実を確かめてからにしたい。あくまでも教師のいらいらが爆発した、と学生に感じさせないようにしたい。クラスが終って個人的にあやまりにゆくと、あっさりと許され、授業中は静粛にするよう言われると、学生はホッとするのである。しつこく叱るのはよくない。叱るとき、学力のある学生とそうでない学生を比較するような発言は絶対にすべきでない。叱るときは個人的に、ほめる時は公表すること。教育は、ほめることによって効果があがる。叱ることによっては何も得るところはない。ただ重苦しい沈黙が90分つづいて、学生は疲労してしまう。沈黙を守らせるよりも和気あいあいの雰囲気をつくる方が質問も出てきて、学生のためになることだってあるのだ。

また、クラスで叱るとき、あっさりと切り上

げなければいけない。いつまでもしつこく小言を言っていると、つい失言してしまう。それが当の学生にとって決して忘れられない侮辱とうつるのである。本当に（困り者）で（クラス一の劣等生）と思っても決してクラスでも個人的にも言うてはいけない。叱る時は、遅刻しないように、私語をつつしむように、予習復習をするように、というふうに叱る。「だからあなたの成績は…」と小言が発展することはタブーである。

### 【教え方】

学生の私語は実際教師にとっては、もっともいやなことであるが、学生はそのことについてあまり罪の意識はない。私語が多い理由には、教え方がよくないか、興味がないか、教師の言う意味がわからない場合などもある。私語と欠席の問題は、教師の教え方によっては、かなり解消されるのである。授業を受けないと自分が損である（単位を落されるのではない）と学生に感じさせるような、情熱のこもった、学生の関心を引きつけるような講義をすることである。平常点が悪くなるから出席するのではなく、良い授業であると学生が感じるような講義をすることである。

では良い授業をするにはどうしたらよいであろうか。話はいささかそれるが、予備校の授業をとりあげたい。予備校とは、たった1年間で、生徒を教えて、進路を決めて、大学合格を勝ち取らせることを目的とする、この種の学校では、講師の教え方に非常に強い要求をしている。

どの予備校でも、教え方に対する注意は、ほぼ同じであるので、平均的なものを要約して紹介しておく。

予備校では良い教え方をする講師のクラスは超満員になるし、一方頼りない講師のクラスは生徒がどんどん減ってゆく。学校当局は各クラスにビデオカメラを設置して、授業内容もみている。また別の学校では年2回生徒のアンケートをとって、担当講師の評価をさせ、各講師に

その結果を郵送する。(1)授業はとても満足、(2)まあまあ満足、(3)不満、この3段階である。(1)と(2)合計で65%以上ないと講師不適格である。またよい授業であれば200人もの難関大学志望の生徒を1室に入れても、私語する者は一人もいない。怠けるともう1年浪人になるかもしれないからである。まさに真剣そのものである。英作文は率先して板書しており、講師の添削を求めている。

学校側の講師に対する要望は、ほぼ次のようなものになっている。

- (1) 充実した授業が基本、生徒がよくついてくる先生は、授業準備が徹底的に行われている。充分な教材研究とシナリオ準備をしてもらいたい。学識の高い先生の授業が必ずしも素晴らしいとは限らない。
- (2) 先生の声が教室の後方まで、しっかり通るように発言する。
- (3) 語調は、強調するときや、かるく流すときなど、メリハリをつけること。
- (4) 黒板の字は、大きく分かり易く、丁寧に書くこと。
- (5) 授業はあくまでもテキスト中心に進める。
- (6) 生徒は予習をして授業に臨むので、単なる答え合わせのみの授業とならぬよう心がける。
- (7) その教科の面白さ、学ぶ楽しさ、厳しさなどを感じさせる。
- (8) “テキストを教える”のではなく、“テキストで教える”ことを根本姿勢として前面に押し出す。
- (9) 脱線もおおいに結構。ただし授業の中での脱線は本線があってこそ成立するのであるから、本線が生き生きしてくるような脱線を歓迎する。
- (10) 生徒は強い指導性を要求するので、自信のある態度で授業に臨むこと。
- (11) 充分な予習で授業に臨むこと。先生の予習不足は生徒のやる気を損なう。

われわれに関係のある注意事項は、以上のものくらいであるが、予備校当局の真剣さが

伝わってくるようである。

さて、われわれの授業は予備校とはいささか異なるが、基本姿勢は同一といえる。

出欠を厳しくするのは、本来、教育的配慮なのであるが、極端になりすぎて、筆記試験の結果より出欠点を優位におくのは好ましくない。授業中に説教となり、単位をやれないかもしれない、などとおどすのは、学生の反ばつを招く。学生の欠席が多い場合、もしかしたら、その教師に対する反ばつが原因であるかもしれないと考える必要がある。クラスで、必修の単位をやれないなどと言い、しつこい説教がつづくとしつこい沈黙がクラスを支配する。学生の質問はない。これはよい授業とは言えない。すくなくとも、学生を教室にひきつける教師の人的魅力がないのは確かである。教授方法もよくない、テキストも面白くない。となると勉学意欲など望むべくもないことになるであろう。

必修で出席を重視する教科は、教えやすいというが、実は、選択科目とちがって強制的な面があるので、一番やりにくいものであることに留意すべきである。そして必修だからこそ全学生を満足させなければならない。また、教室では学生とのコミュニケーションを計ることも大切である。一方的講義が必要な時もあるが、学生の共感を誘ったり、反対意見を言わせたり——授業は学生と教師の協力で成り立つことを自覚したい。学生にとって教師は絶対権限保持者として映る。その中で、学生の気持をほぐし、学生の顔色をみながら、ときに脱線したり、笑わせたりして、大切なポイントをしっかり教えこむのである。

板書については、すでに記したが、筆者も反省した経験がある。黒板をほぼ4等分にして、左のコラムから板書してゆくのであるが、だんだんそれが、あちこちに書くようになって、学生はどこに書いたのか判らなくなる。どんな短かい英文でも、口頭だけですますと失敗する。テストの採点のときに、口頭だけの解答では駄目であることが分かるのである。例えば英語表現の場合、解答だけでは、学力のある学生は退

屈である。それでは教場にくる意味がないのである。効果的な教え方を教師自からが工夫してゆかなければならないのである。高校の英語と同じであると学生に思わせたらもういけない。教師の行動の根底にあるものは、学生への愛情であろう。本来、教育の根本は、生徒・学生にほんとうに愛情がもてるか、から始まるのであるから。

### 【テスト・採点】

高校と異なり、テストの回数は非常にすくないが、採点の作業は教師にとって、どのような意味をもつだろうか。当の学生は、教師の考える以上にテストの結果に関心をもっている。筆者の体験では、採点するときは不安である。その出来不出来は、自分の教え方が良かったか良くなかったか、を示すからである。もし多くの学生が同じ個所を間違えたならば、それは教師の教え方が不十分であったといえる場合もある。英語の場合、学生の間違いそうな個所を予想して、そこを重点的に教えるのであるが、それでも事前に予測した所と、学生の誤って答える個所がずれる場合がある。

テストの結果は、学生にその答案を返すべきものである。通年科目の前期試験の場合はなおさらである。学生の誤りを確認して後期のテストに備えるのである。そうしなければ学生はどこをまちがって得点がいくらであったかが分らないであろう。得点を知らせるだけでは、一方的でよくない。

テストの結果が平均してよくない時は、教え方、出題が不適切か、学生の関心や努力の不足が考えられる。しかし教師の教えが悪ければ、学生は興味を示さず、勉強もしなくなるわけであるから、テストの出来具合の悪い場合、その責任の大部分は教師の側にあるといえる。したがって筆者にとっては、採点は教え方の自己点検の作業である。

採点の結果の公表は、平均点、Aが何名、Bが何名、という形ですべきで、個人、とくに60

点以下の個人名をあげるべきではない。答案を返せばすむことである。60点以上をとれなかった学生は後期のテストで頑張るように言えばよい。

### 【学生のアンケート】

学生のアンケート調査は、とても参考になる。学生はまじめに答えてくれる。この調査をしないと、どうしても教師の独善的なものに終ってしまいそうである。筆者の経験であるが、英語検定試験、受験対策の授業では、2冊のテキストを与えているので、年2回の試験に向けてどうしても急ぐのである。学生の立場に立ったつもりで正解にだとりつけるよう、筆者一人で答を出したところ、アンケートでは「もっと学生にあててほしい」というものが何人かいた。こういう場合、学生にやらせると進度が非常ににぶるのであるが、彼等の意欲は生かしてやらなければいけない。教師の考えている進歩よりも、学生の分かる授業と学生の興味を深めていくことの方が大切であろう。

学生も決して安易な授業を好んでいるわけではない。自分達のためになるものなら喜んで努力する気はあるのだ。私語する学生もいるが、真剣に聞いている者の方が圧倒的に多いのだ。

アンケートの一つの問題について、2、3人でも同じような意見が出てくる場合は、何か教師の側で考慮すべきことが存在すると考えるべきだ。教え方か教える内容に問題があると考えなければならない。

### 【教育技術】

クラスで教えているとき、一本調子でしゃべってはいけない。どんな科目でも重要な個所は、語気を強くして、くりかえし説明すること。そして板書することである。学生は一度耳に入っても憶えられないので必ずノートに書かなければならない。教師はせめて要点でも板書してやる必要がある。早口の授業では、教育的

効果が薄い。「このあたりは、さして重要ではないが、～はとても大切である。赤線を引いておくこと」という具合に、口調にも緩急・強弱・メリハリをつけることは、小学校から大学まで、どの段階においてもやらなければならない。外国人教師の授業はおもしろいが、日本人教師は、たとえ良いことを言っているもおもしろくない。と学生は言う。外国人教師に比べて、概して日本人教師は教育的演技、パフォーマンスがへたである。パフォーマンスがどうしてもできない場合は、情熱にあふれた、創意工夫ある講義と板書に徹すればよい。学生はそれで満足するであろう。

英文を日本文に直すとき、直訳だけではよくない。それは日本語ではどういう気持を表しているかが、学生に理解できるようにしなければいけない。とくに物語などの場合、日本語訳は国語表現と密接に関連付けて教えないといけない。直訳をして、その後にコンテキストを考えた日本語にホン訳してやると、学生は非常に満足し、英語を身近なものと感じ、興味を増すようである。

私語は教師にとっていやなものであることは既にのべたが、実は私語の中味が問題であろう。授業中、隣の学生としゃべらなければならないことだってあるのだ。とくに教師の言葉が聞きとれない、板書してくれない、字がみえない、その意味がわからない。教師の側で反省すべきこともあるのである。そういえば教師も学生時代に沈黙を厳守したかどうか考えるべきである。

若い女子学生にあっては、私語はどうやら酸素のようなもので、これなしではクラスに座っておれないものもいるようだ。したがって学生を強く引きつける何かがある。パフォーマンスか、個性豊かな、情熱に満ちた、創意工夫ある講義ということになる。私語については、したがって、“他人には寛大に自らには厳しく”というところである。つまり、教師には忍耐力が要求される。この忍耐力のない教師は、教育者にふさわしくない。

そして実はこの忍耐力、換言すれば、寛大な心が、クラスの雰囲気（きふい）をなごやかなものにし、学生の自由な質問も出てくるようにする原動力なのである。教師の寛大な心は、したがって学生のためになるのである。そして教師は、日によって陽気になったり、不機嫌にならないよう努力する必要がある。つねにコンスタントな態度で学生に接したいものだ。

### 【対等の気持】

学生と教師は、クラスにおいては教えられる人と教える人であるが、授業以外のところでは、人生の後輩と先輩である。クラス以外のところでも教師面をするのはよくない。対等の意識、仲間意識をもつ方がよい。短大では2年間しか両者が接触する期間がないのだから、教師の方から学生の側へ積極的に接してゆき、親密なコミュニケーションを築く努力を始めることが良い。そうすれば、授業においても好ましい雰囲気が生まれ、質問もしやすくなる。現在の高等教育、とくに短大教育は教えることだけしっかりやればよいのではない。学生のために体を張って努力してやらなければ、この激減期に生き残れないだろう。今、学生との親密な接触を積極的に求めると言ったが、例えば、入学直後の専攻別オリエンテーション、球技大会、海外研修、樹麗祭、クラブ活動などの時がよいチャンスである。直接学生への電話、暑中見舞や年賀状への返事、キャンパス内で学生にちょっと話しかけたり、いろいろ機会はある。卒業記念パーティーなどは学生時代の最後のチャンスであろう。また、教師は卒業生に対しても、つねに温かい気持がなければいけない。樹麗祭の前には電話なり書状で、後輩のお祭を見てくれと依頼したり、同時に開催される同窓会総会とパーティーで会おうと呼びかけるのがよい。学生時代のグループの一人に言えば、仲間をさそって来てくれる。すっかりＯＬらしくなった卒業生と再会するのは楽しいものだ。在学生には先輩を紹介してやるチャンスにもなる。総会前夜は卒業アルバム

をめぐって忘れかけた記憶をよみがえらせて顔と名前を一致させるのである。総会とパーティーそして研究室での雑談、年一回の楽しいひとときだ。在學生は後片づけで研究室に出入りする。樹麗祭と大学見学会と卒業生の集いと、忙しい一日は終る。OGたちはすっかり学生気分にもどっているし、結婚の予告をするものもいる。球技大会も在學生だけの競技であるが、授業以外の活動のみせられて、ある発見がある。授業中注意ばかりされる学生が、実に生き生きとしてリーダー振りをみせているのである。教員がこれら学生の中に入りこんでゆくよい機会である。全員の合宿やエクスカージョンでも、彼等と行動を共にすることによって、よりよいコミュニケーションが達せられる。廊下での一言、電話一本で、ピクニック中のちょっとした雑談などが、どれほど学生と教師を親密にするか計り知れない。なるべく長く頻繁に学生と接することが重要である。我々の学生時代でも、たまには教師とピクニックに行ったことを思い出す。今の学生は、特に短大生は2年間で、卒業してしまうし、その期間内に母校への愛情を培わなければならない。またOGたちが樹麗祭にキャンパスを訪れ、懐かしい思いにひたっている、施設を見ただけではわびしい限りだ。昔習った教員と再会することによって、キャンパスを再訪した目的は完成するのである。昔手こずった学生が、すっかりOLらしく成長した姿を眼にすることは実に楽しいものである。

### 【研究室で】

「研究室」のことを英語では office という。study room といえば「書齋」になってしまう。大学の研究室は研究もするし、しなければいけないのだが、学生の悩みや相談など、いろいろな事ができる場所である。筆者の実験であるが、以前は学生たちの相談で、研究室を使っていたが、最近では、学生たちに次のように言った。「週三日しか私は学校に来ていないが、三日間については、研究室にいつでも来てよろしい。

研究室訪問日である。相談ごとのある人はもちろんだが、用事のない学生も歓迎する。昼休みは、食堂もいっぱいだし、一人で食べるより、みんなと語り合いながら食事をする方が好きなので、私がアドバイザーをしている組以外のものも来てよろしい。”

これは一種の実験であった。平成5年度の新学期から始めたが、以後つづいている。これには次のようなメリットがある。

- 1) 教師と学生のコミュニケーションが計れる。
- 2) 授業やそれ以外のことについてもいろいろ指導できるし、学生の要望がわかる。
- 3) 学生の名前、性格、考え方がわかる。
- 4) 学生の悩み、家庭環境がわかる。
- 5) 就職や将来の進路について、学生の情報を収集できる。
- 6) 若い世代の考えなどがわかる。
- 7) 1, 2年がいっしょになったり、卒業生が訪問してきたりして、語るることによって、先輩後輩のつながりができる。
- 8) 2年生の就職試験について、直接研究室から人事課に電話をさせ、時には教師が企業の人事課と連絡をとり、学生をサポートできる。

このようなメリットも、それ以前に、教師に対する畏怖の念、警戒心をといておかなければならない。これが毎日教師が出校する状態であれば、研究室訪問も時間を限定しなければならないであろうが、今のところ三日であるから、集中的に office で対応できる。学生も筆者が出校する曜日を知っているため、特別な用事で3日以外に出校したときなどは、その理由などを聞かれ、研究室に行ってよいかと尋ねられる。とくに2年生については、学内に公衆電話がすくないため、研究室の電話の使用は重宝がられる。就職の内定の情報がいち早くこちらに伝わるし、留守のときは自宅の方に連絡してくれる。筆者の昔の同期生、同窓生、先輩に、名簿だけを頼りに、学生の就職の推薦状をかい、見事内定したときは、ほんとうにこちらも愉快であ

る。

研究室にくる学生にも、いろいろ役割分担ができてくる。飲物をつくる人、洗い物をする人、専ら食物の世話をする人、ふきんの汚れを筆者に注意する人、スポンジ等を買ってきてくれる人、昼休みは、時には数グループがかち会って10数名になることもある。したがって折りたたみのパイプ椅子を用意した。最近の学生はきちんと洗って片付けてゆく。30分、40分間の騒々しさは、隣接のオフィスの先生方に申し訳ないが、昼休み中なので我慢していただくしかない。

ときどき深刻な家庭的悩みをうちあけられるが、そのときは対等の立場で解決策を考える。そして就職内定が決まり、卒業試験に合格し、問題が解決し、本人の晴れやかな微笑に合うとき、心から安堵の胸をなでおろすのである。

## 【卒業】

たいていの学生たちは卒業までに親友をみつめて、卒業にあたっては、この2年間、生涯の友をみつけることができ幸せであった、と感想をのべる。しかし教師としては、ただこれだけでは物足りない。学生と教師の人間関係が親密で、とても学校に愛着をもった、ということろまでゆかないと不充分であろう。

昔と比べて、今の高等教育は就職するためのステップ化しているが、教師は資格取得や就職試験の対策だけでなく、学生とのよき人間関係を造りあげる努力をすべきであろう。現在の高等教育は、勉強させるだけでなく、いわばサービスの要素も持っている。サービスといっても、教師によっては中味を異にするかも知れない。やたらと学生におもねるのでは、決してサービスとは言えない。「学生のためになる」ことをしてやることは言うまでもないが、世の中の人間関係について、家族、結婚、愛情などについて、つね日頃学生に話してやるのが大切である。授業を厳しく行うことは極めて重要であるが、それだけでは片手落ちであろう。要は、教

師が学生たちに深い愛情をもつこと。教師对学生の関係のすべてはここから始まる。

卒業式後、また卒業記念パーティーにおいて、手こずった学生とも、楽しく談笑しながら前途を祝福してやることも高校とは異なる光景かもしれない。どんなつらいことも、叱られたことも、今はよき思い出として語り合うことができる。ある意味では、短大とは、教養的な学問と専門の基礎を教えながら、将来懐かしい思い出となるもの、思い出作りをするところである。それは極めて些細なことでもよい。OGが便りに書いてくる「研究室でいただいたレモンティーはとてもおいしかった」。こんな事でも思い出になるのである。

卒業記念パーティーがいよいよ最後の日。心から惜別の情が湧く。晴れやかな顔で語り合う姿を眺めていると、いろいろ思うことがある。社会に出て、立派にやってゆけるか、よき友、よき思い出ができたか、彼等と最後の語らいをしているとき、教師の生き甲斐を感じる。そして卒業アルバムは教師にとっても宝である。

以上筆者の体験——その実験と失敗と成功と今後努力したい事柄をとりとめもなく書いてきたが、これからも、勇気をもって実験に挑戦しなければならないと考えている。

Sept. 1994